

# 地域との連携を重視した防災教育カリキュラムの研究 — 串本町潮岬における防災教育の実践を通して —

串本町立潮岬中学校  
教諭 森田成一

## 1 研究のねらい

日本は地震多発国であり、地震とそれに伴う災害が人々の命や暮らしを奪うことが少なくない。紀伊半島沖に東西に延びる南海トラフ付近を震源とする東南海地震と南海地震は、約100～150年周期で発生するプレート境界型の巨大地震であり、近い将来、高い確率で発生が予想される（平成17年地震調査委員会の長期評価による）。これらの地震が発生すれば、太平洋沿岸に大津波が押し寄せ、本県全域において、地震と津波による多大な災害を被ることは確実である。本県ではこれらの地震や津波等について様々な防災対策を進めている。「学校における防災教育指針（和歌山県教育委員会、平成15年）」の策定もその1つである。

串本町は本県最南端に位置し、震源や津波の波源域に近接しているため、深刻な地震・津波災害の発生が予想される。他地域以上に、地震とともに津波についての防災対策を充実させねばならない地域であり、そのためには防災教育の充実が不可欠である。

学校における防災教育を通して、生徒が地域の人々と関わり連携を深めることは、将来にわたって地域の防災に貢献できる人材を育成するとともに、地域全体の防災意識や防災対応能力を高めることにつながるであろう。

地域の実態や特性に応じて、各教科、道徳、特別活動と関連させた防災教育は、総合的な学習の時間に位置付けることができる。本研究では、総合的な学習の時間を中心とした防災教育の実践を通して、地域との連携を重視した防災教育カリキュラムの在り方を考えていきたい。

## 2 研究の仮説

串本町では昭和南海地震以来、地震災害を受けていない。近年、地震災害を経験した町民は少なくなりつつある。近い将来、発生が予想される地震災害に対して、緊急に備えを整えねばならないという町民の意識は高まっているものの、自主防災組織の関係者らによると「明日起こるかも…」という危機感を持ちながら防災対策をするまでには至っていないのが現状である。

本校においても幼稚園・中学校合同避難訓練や修学旅行での防災体験、消火訓練、心肺蘇生法等の体験活動に取り組み、生命の尊さや、他人の生命・安全の尊重について学校教育活動全体を通して指導してきた。本校生徒のほとんどは大きな災害を経験したことがない。また、校区（潮岬地区）では地震による津波災害の心配もほとんどない。これらの要因もあってか、これまで防災に係る体験活動を実施しても、生徒による主体的な行動はほとんど見られなかった。しかし、この状況には、指導者が、生徒の主体的な学習を成立させる指導方法を確立できていなかったことや、取組が学校内に留まり地域との関わりを重視してこなかったことに主たる原因があったと考えられる。

潮岬地区で組織されている自主防災会は、災害時には地区から離れることが多い高校生よりも、中学生の活躍を期待している。地域の自主防災会と連携した学習は、生徒が、地域で、地域の人々とともに、防災活動の大切さを学び実践する機会となり、防災意識の向上に有効であろう。また、生徒を通して保護者の意識を高めたり、あるいは教員や自主防災会をはじめとする地域の人々の意識をいっそう向上させることにつながるのではないだろうか。

地震の発生は突発的で、訓練で想定した以上の事態が起こることもある。災害を最小限に抑えるためには、地震についての知識・理解とともに、実際に地震が起こった時の状況に対応できる自助力、そして地域における共助力を育てることが必要である。

以上により、次の研究仮説を設定した。

地震災害に関する防災教育カリキュラムにおいて、地域との連携を重視した取組を進めることで、生徒の自助・共助力が防災意識とともに、地域の人々や教員の防災意識の向上を図ることができるだろう。

本研究では、第3学年を対象とした総合的な学習の時間において、潮岬地区の自主防災会等と連携した防災教育を計画し実施した。この授業を通しての生徒の変容を中心に、教員及び連携した方々からの聞き取り調査の結果をもとに仮説を検証する。

### 3 研究の内容と方法について

#### (1) 検証授業計画作成にあたって

平成18年7月に第3学年の生徒を対象に実施したアンケート結果によると、生徒には、地域の過去の災害や想定される災害についての知識や災害対応能力は、十分に身に付いているとは言えない状況が明らかになった。そこで、学習内容として、潮岬地区に重点を置いた災害や防災対策についての学習を設定した。指導にあたっては、教室内での学習や、校内での体験に留まらず、可能な限り校区内在住のゲストティーチャー等の協力を得たり、校外でのフィールドワークを取り入れたりするようにした。また、生徒が学習過程において、より具体的に災害をイメージできるようにするために、次の5つの内容を学習に位置付けた。

(ア) 昭和南海地震の体験に学ぶ (イ) 串本町の防災取組の実態を学ぶ  
(ウ) 校区（潮岬地区）の防災についてフィールドワークで学ぶ  
(エ) 校区（潮岬地区）の防災についてDIGで学ぶ (オ) 地域に発信する

地域との連携としては、次の3つが考えられる。

・ 校区に住む人々との連携 ・ 保護者との連携 ・ 行政との連携

今回は、上の(ア)、(イ)に関して、過去の地震津波被害や現在の防災対策について、地元の体験者や町の防災担当者から直接学ぶという連携を行う。(ウ)、(エ)の学習場面では、DIGやフィールドワークを行う際に、保護者や自主防災会を中心とした校区の人々との連携を行う。また、(オ)については、一連の学習成果を地域に発信することにより、地域全体が防災について考える契機とする。今回の検証授業には盛り込んでいないが、将来的には串本町内の各校において生徒が学んだ成果を相互に発信し合う仕組みを開発したいと考える。

#### (2) 検証授業について

ア 単元名 「その時、私は・・・ ー串本町における潮岬の防災を考えるー」  
(総合的な学習の時間)

#### イ 単元目標

- ・ 巨大地震により串本町で発生する災害について理解する。
- ・ 災害時において自らの命を守るため、的確に判断し行動できる力を身に付ける。
- ・ 災害後のボランティア活動の意義を理解し、地域の活動に積極的に取り組もうとする態度を身に付ける。

ウ 授業計画

時	学習活動等	評価規準			
		設定力	解決力	表現力	自覚
1	単元のガイダンス 防災学習の意義・テーマ設定 地震について、知っていることを話し合う。 地震が起きると、串本町ではどのような災害が起こるのか考える。	① ②			
2	「昭和南海地震の体験に学ぶ」潮岬の防災について考える。 南海地震を体験した人の講演 自主防災会、行政との連携	① ②			①
3	「今、串本町の防災は！」 潮岬の危険場所、避難場所や避難経路、井戸、防火用水について学ぶ。 自主防災会、保護者との連携		① ②		
4	「潮岬地区の防災フィールドワーク」 潮岬自主防災会担当者とフィールドワークを行う。		② ③		
5・6	「潮岬地区における防災マップ作り」DIG実習 地域の自主防災会と共同でワークショップを行う。 自主防災会、保護者との連携		① ③		
7・8	「学習を振り返ろう！」 発表準備 防災学習から学んだこと、考えたことを振り返る。			① ②	
9・10	「防災学習報告会」 各班の発表、防災に関する串本町潮岬の取組 (全校生徒、保護者、潮岬自主防災会担当者、学校評議員参加)			① ②	
11	「その時、私は・・・ ボランティアとしてできること」 災害時に、自分たちができることを話し合いまとめる。 (※この授業の事前指導として、道徳「トイレの水くみ」を実施する。) (阪神・淡路大震災時の避難所における体験についての内容である。)				② ③

評価規準

課題の設定力	問題の解決力	表現・発表力	生き方についての自覚
①災害に対しての知識を深め、防災教育の必要性を考えることができる。 ②地震による災害を自分のこととして、受け止めることができる。	①災害に対して、見通しを持ち、安全のために備える計画を立てることができる。 ②調査活動に進んで取り組み、災害時の適切な行動を考えることができる。 ③活動の成果から災害について考察し、課題を見つけることができる。	①学習を通して学んだことを、まとめることができる。 ②発表内容をわかりやすく伝えるための工夫ができる。	①災害への意識を持ち日頃からの備えの大切さがわかる。 ②自分の生命の大切さや、他の生命の尊重について深く考えることができる。 ③災害時に自分ができるボランティアについて考えることができる。

4 検証授業の概要と意義

全11時間のうち2～10時(7・8時を除く)について指導の概要と意義を述べる。

(1) 第2時「昭和南海地震の体験に学ぶ」

ア 授業の概要

「身の安全は自らが守る」、すなわち自助が防災の基本である。本時は、災害を自分に関わることとして受け止める意識を育成することを目標とした。

講演は、東南海・南海地震が発生した当時の潮岬における被害状況や地震の体験とともに、災害時に身の安全を守る方法や備えについての教訓にも触れた内容であった。感想や

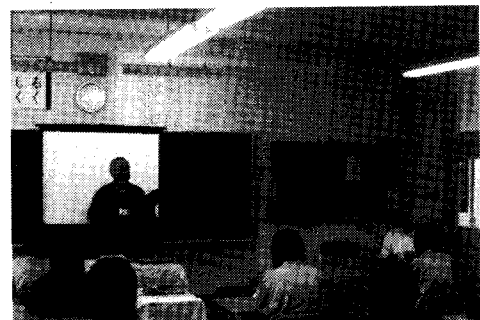


写真1 南海地震の体験を聞く生徒

学習した内容については、ワークシートに記入させた。

#### イ 災害体験から学ぶ意義

授業の冒頭で、「もし今、地震が発生したらどうするのか、普段の生活で備えているか」と講演者から質問された場面において、ほとんどの生徒は、「備えていない」、「どうしたらいいかわからない」と答えていた。実際に災害を経験していない生徒にとっては当然のことであろう。

災害を実際に体験した人による身近な地域についての話に、生徒たちは真剣に耳を傾けていた。生徒の主な感想は、以下の通りである。

- ・本当に地震は怖い。次の地震に備えて、もっと真剣に避難訓練に取り組みたい。
- ・日頃から、いつ地震が起こってもいいように、備えをしておくことが大切だと思った。
- ・地震に関する知識を持って、災害が起こったら、少しでも早く対処できるようにしなければと思った。

感想からは、地域の災害を知ったことによって、地震災害の怖さを現実的に感じ、これまで他人ごとには感じていなかったことを認識できたことが伺える。

昭和南海地震から60年が経過した今、過去の地震災害の体験から学ぶことは、地震災害の怖さを伝えるうえで重要である。自分が住む地域の地理的条件を考慮しながら、地域の一員として何を考え、どう行動すべきかを考える学習の導入として適切であった。

### (2) 第3・4時「今、串本町の防災は！」「潮岬地区の防災フィールドワーク」

#### ア 授業の概要

串本町潮岬地区の防災について学習することによって、災害時の適切な行動について考えさせることを目標とした。

学習にあたっては、潮岬地区の自主防災会の担当者の協力を得た。全体でのガイダンスを行った後、生徒は各自の住む地区(10地区)に分かれて、自主防災会の担当者から、地図をもとに、避難場所、井戸の位置、防火用水の位置、防災収納庫の位置等についての説明を受けた。その後、各地区でのフィールドワークを行った。

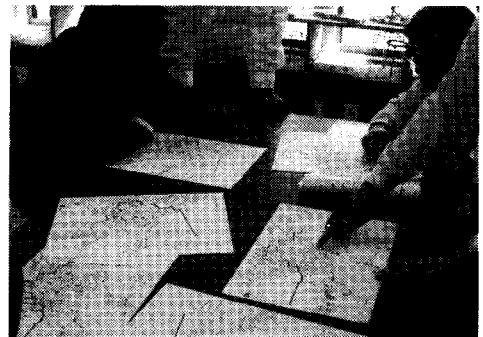


写真2 潮岬の防災を学習する生徒

フィールドワークでは、各地区の井戸や電柱、消火施設等の位置とともに、災害時における危険場所や避難場所を確認した。

#### イ 地域を学ぶフィールドワークの意義

自主防災会の協力によりフィールドワークを実施する中で、地震によって崩れたり、倒れたりする恐れのあるブロック塀や自動販売機等が意外と多いことに気づき、避難場所案内板等を新たに発見する生徒がいた。

学習後における生徒の主な感想は以下の通りである。

- ・校区の危険地域について真剣に考えたことがなかった。防災は訓練だけだという考えが自分にあり、登下校中も地震による災害を意識しないといけないと思った。
- ・避難所として指定されている所も決して安全とは言い切れない。どこに避難すれば安全なのか、学校、地域ともう一度考えなくてはいけないということがわかった。
- ・自分の住んでいる地区を再発見できた。これから地域の見方が変わってくるように思う。自分の地域を見直して、行動できるような防災を実践したい。

期待していた以上の反応であった。生徒が実体験を通して、災害に対する意識を向上させることができたと考える。単なる説明だけでは、このような気づきや発見を与えることは難しいであろう。

地域の地図を用いながら、地域の人々と共に、現地において1つ1つ確認し、話し合うというプロセスを経験させたことが、効果的であったと考える。

### (3) 第5・6時「潮岬地区における防災マップ作り」DIG実習

#### ア 授業の概要

災害時の被害を最小限にとどめるための有効な手だてとして、地域における災害時の様子を予測した防災マップ作りが、各地の防災の取組として実施されている。本時は、フィールドワークでの学習をもとに、潮岬における防災マップの作成を行った。

前時に続いて、潮岬自主防災会のアドバイスのもとに、地区別に作業に取り組み、最後に全体地図をまとめた。井戸の位置や防災収納庫の位置、防火用水、電柱の位置等を、種類別に色分けして示すようにした。

一般的な防災マップには、一時的な安全を確保する一時避難場所、延焼火災等から安全を確保するための広域避難場所等や負傷者用の臨時救護所、緊急輸送路等が示される。

ここでは、生徒の地域における災害対応能力の向上を目的としたため、自主防災会の方と協議したうえで、潮岬地区の状況に応じ、上記のような内容のマップを作成した。

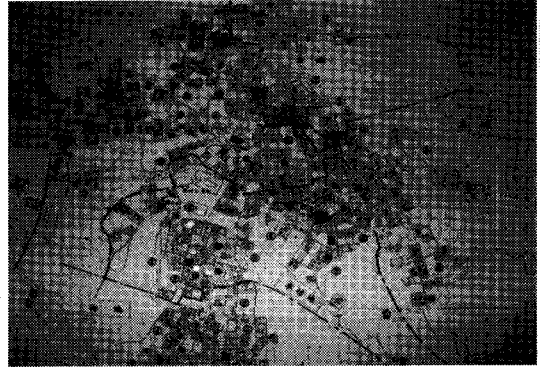


写真3 生徒が作成した潮岬の防災マップ

#### イ 防災マップ作成の意義

学習を行う前は、生徒のほとんどが避難場所すら知らないという状況であり、通学路の街並みを防災の観点で見つめる経験もなかった。今回、地域の住民と連携して防災マップ作成に取り組んだことで、地域の実態に即した防災について考え、防災についての意識を飛躍的に高めることができたと考える。

生徒の感想文には、次のような内容が多く見られた。

- ・自分たちが作成した防災マップを見て、安全に避難する方法を考えてほしい。
- ・この防災マップを地域の人に役立ててほしい。
- ・防災マップを串本町全体に発信していきたい。

防災マップの作成を通して、生徒は学習の成果を校区あるいは串本町全域に発信したいという意識を持つようになってきている。災害から自分や家族を守るために、より多くの人に自分たちが行った学びの成果を伝えたいという意欲が芽生えているのかもしれない。このような取組が、本校だけでなく多くの地域で展開されれば、住民の多くが防災についての知識を持つようになり、防災力の高い地域形成につながると考えられる。

### (4) 第9・10時「防災学習報告会」(全校生徒、保護者、潮岬自主防災会、学校評議員参加)

#### ア 授業の概要

これまでの防災教育で取り組んだ学習内容について、グループごとに報告会を行った。全校生徒、保護者、潮岬自主防災会、学校評議員が参加した。報告会に向けては学習内容を振り返り、深めさせることを目標とした。

#### 報告内容

- 1班「防災学習の必要性について」
- 2班「東南海・南海地震について学習したこと、東南海・南海地震を体験した方から学んだこと」
- 3班「潮岬の防災について、潮岬自主防災会の人たちから学んだこと」
- 4班「地震災害について、日頃からの備えのことや、災害後の行動マニュアルについて」
- 5班「地震災害後、自分たちにできる取組や、潮岬幼稚園との避難訓練など」

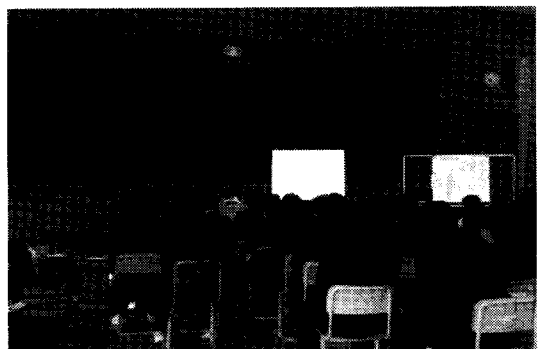


写真4 防災学習の成果を報告する生徒

報告会は、「私たち中学生が地域の中心となって学習したことを行動に移し、この学習を意識して今後も取り組んでいきたい」という生徒の言葉で締めくられた。その後、本時の学習についての感想を書き、自分が災害時にできることは何かを話し合った。

イ 「伝える」ことの意義

報告会を終えて、生徒の感想文には、次のような内容が見られた。

- ・今まで防災のことについて学習した内容を甘く考えていたが、今回の学習で他の班の報告や来賓の方々の話を聞いたりして、さらに防災の意識が高まった。
- ・今回の学習でいろいろな知識や情報が増えたことがよかった。そのことを家族などにも伝えて、本当の地震が起こった時の対策を考えたいと思う。
- ・今回の学習で学んだことはたくさんあるが、地震で逃げる時に何が必要か、逃げた後での行動について考えることができた。人は実際、その時になると考えていることとは違う行動をしてしまうかもしれない。しかし、自分の命を大切に、大人になってもこの学習を生かしていきたいと思う。また、周りの人たちにも教えてあげようと思った。

生徒が自助・共助に関して地域における役割を意識することができ、防災意識を高めることができたことが伺える。また、防災マップ作成後のアンケートにも見られたように、学習した内容をさらに地域に発信していきたいという意識も見られた。

この報告会に参加した1・2年生についても、3年生の報告を受けて来年度以降、防災についての学習は大切だという意識につながったと考える。

報告会に参加した1・2年生の生徒たちは、次のような感想を記している。

- ・防災の大切さがわかりました。家では非常食がないので、これから家族と話し合って、用意しようと思います。
- ・大地震に備えて準備するべきだと思った。3年生が学習したことを聞いて、大地震の怖さが本当にわかりました。大地震が今は来ないと思って安心していたが、それではいけないことがわかった。

地域の人たちを対象に防災学習の報告会を行うことは、生徒が新しく得た知識や情報をもとに地域の新たな課題対策は何かを考えるきっかけとなった。また、他学年の生徒にも効果が波及していることから、報告会に参加した保護者をはじめとした地域住民への啓発にもつながったと予想される。

5 検証授業の考察

(1) 生徒の意識変化

検証授業終了後、生徒の防災意識についてアンケート調査を行い、学習前に実施した同様のアンケート結果と比較した。

表1 地震発生の知識や地域との関わりについてのアンケート結果

質問事項	回答(26名)		回答(25名)	
	学習前		学習後	
A あなたが住んでいる地域で町が指定した避難場所を知っていますか。	はい 15名(57.7%)		はい 24名(96.0%)	
B 今、身近に地震が起こった場合の情報はどうのような手段で知ろうと思いますか。	テレビ 21名(80.8%) ラジオ 2名(7.7%)	テレビ 6名(24.0%) ラジオ 14名(56.0%)		
C 東南海・南海地震の災害発生時に頼りにする人は誰ですか。(3つ回答)	自分自身 21名 家族 25名 近所の人 5名 消防、警察 19名 親類 6名 先生 0名 その他 2名	自分自身 24名 家族 23名 近所の人 17名 消防、警察 6名 親類 3名 先生 1名 その他 1名		
D 地域の自主防災会との防災学習によって、潮岬における地震災害についてよくわかりましたか。			よくわかった 19名 ある程度わかった 6名 あまりわからなかった 0名 わからなかった 0名	

表1は地震発生の知識や地域との関わりについて、学習前と学習後のアンケート結果を比較したものである。Aの質問への回答から、今回の学習を通してほぼ全員が避難場所や避難経路を確認できたことがわかる。フィールドワークやDIGによる体験から学んだ成果であろう。Bの質問に対しては、防災学習前に比べてラジオから情報を得るという回答がテレビを上回った。自主防災会の方との学習を通して、災害時の状況をより具体的にイメージできるようになったと考える。Cの質問に対しては、学習前には近所の人を頼りにするという回答は少なかったが、学習後は、消防や警察よりも近所の人を頼りにするという回答が非常に多くなった。さらに、Dの質問に対する回答では、生徒全員が自主防災会と連携した学習を積極的に評価している。

以上のことから、今回の学習を通して、生徒たちは地域における災害時の状況を正しく認識するとともに、共助の重要性を認識し、近隣住民が互いに頼り、頼られる存在であることに気付くことができたと考えられる。地域との連携を重視した学習が、地震災害に関する知識を身に付けることに加えて、生徒の防災意識の向上にも重要な役割を果たしたと言える。

また、図1は防災学習に関心を持った理由について示したものである。学習前は関心を持った理由として、テレビ、新聞、本をあげた生徒がほとんどであったが、学習後には、学校における学習内容が大半を占めている。校内での学習だけでなく、地域と連携したりフィールドワークを取り入れたことで、主体的に学ぼうとする意欲を引き出したことが、この要因として考えられる。

図2は、東南海・南海地震への関心についての変化を示したグラフである。学習前にあまり関心がないと回答した生徒の多くが、学習後には、関心があると回答しており、学習成果が表れていると考える。ただ、依然として「あまり関心がない」と回答した生徒が3名おり、これらの生徒は理由として「地震災害がまだ先だから」をあげている。地震災害に対する意識について、強く持たせる必要があると考える。

図3は東南海・南海地震に対する家庭での備えの状況に関するグラフである。学習前に比べて、学習後には備えをしようという意識が向上している。特に、地震への関心がある生徒は、行政の対策に注目したり、家庭で防災に取り組んでいたりする傾向が強く、約60%の家庭で既に飲料水、非常食、タンス等の家具の転倒防止等の備えをしているという回答であった。しかし、地震への関心がある生徒でも約40%の生徒については、「しようと思うができていない」と回答している。地域との連携を重視した取組によって、生徒の意識は大きく変化したものの、具体的な行動にはつながっていないと言わざるを得ない。地震に対する備えや防災意識については、生徒だけでなく家庭へと普及させる手だてが必要である。例えば、防災マップを保護者に配布したり、保護者とともにフィールドワークを行った

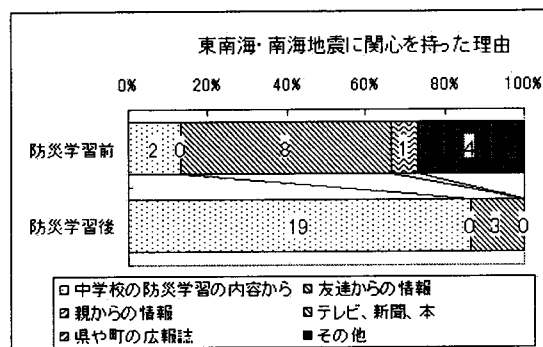


図1 東南海・南海地震に関心を持った理由

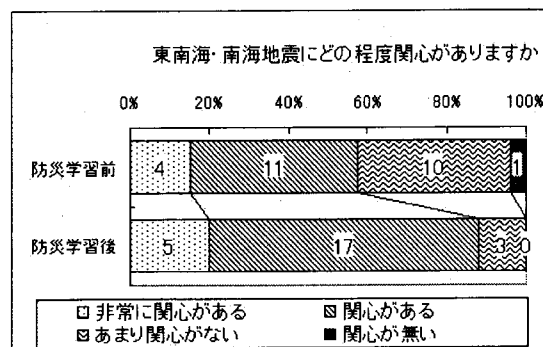


図2 検証授業前後の生徒の意識の変化

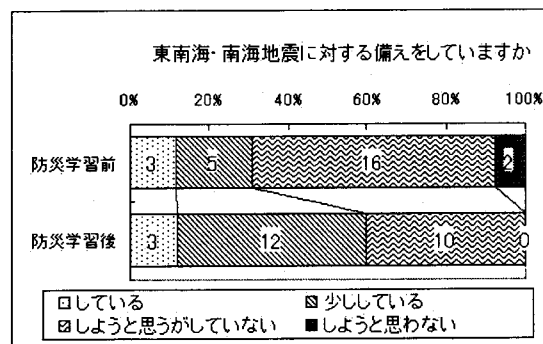


図3 家庭における地震災害への備え

りする等の手だてが考えられる。

## (2) 検証授業実施による教員の防災教育に対する意識変化

検証授業実施後、潮岬中学校の教員を対象として防災教育に関する自由記述式のアンケート調査を行った。

「地域の防災活動を知るとともに、自ら地域の一員として防災活動やボランティア活動に参加していくための大きな一歩となった」、「地域のために生徒が役に立つ存在になれる」等の回答があった。教員自身が今回の授業を通して、地域に目を向ける必要性を再認識できたと考えられる。また、「これまでの防災訓練に比べて生徒が積極的に活動できていた」という感想も見られた。地域との連携を重視した取組は、生徒が地域を知り、地域での役割を考えるよい機会になったと同時に、自主的活動を引き出す手だてとしても効果があったことを実感できたようである。

カリキュラムの内容については「本校の今までの取組と今回の取組を整理・統合した、3年間の学年進行による防災教育カリキュラムの編成が必要」、「学校で取り組むべき防災教育カリキュラムの作成が今後も必要だと感じた」等の回答があった。これらは、本研究のテーマに一致する意見である。

地域と連携した取組を含めた防災教育を、今後とも学校全体で実践できるよう、カリキュラムの作成を行い、防災教育カリキュラム検討委員会といった組織を発足させてはどうかという意見もあり、防災教育に対する教員の意識が高まったと考える。

## (3) 検証授業に関わった自主防災会の方の意識変化

検証授業実施後に、授業についての自主防災会の方の意見を、アンケートと聞き取り調査により集約した。

「防災教育は地域との連携が大切、生徒にも力になってもらいたい」、「潮岬地区は高台のため津波の心配はないが、幹線道路が寸断され孤立する恐れがある。高齢化が進む地区だけに、地域の生徒に頼らなければならないことになる」等の意見が多く出された。災害発生時における本校生徒の活躍に対する期待が強く寄せられていることや、学校での防災教育に対する期待の大きさが感じられる内容であった。

今回の授業については、生徒たちが地域の防災について考え、「自分の命は自分で守る」という必要性や、「絶対生きる」という気持ちを持つことの大切さを理解することができたという点において、大きな成果を感じているとのことであった。しかし、一方で、学習の成果を各家庭での生活に活かしているかについては、まだまだ課題が残っているようである。学習発表会で、自主防災会長の「家庭での備えを進めていますか」という問いかけに対する生徒の様子や、アンケート結果(図3)もこのことを裏付けている。

このように、自主防災会の方にとっては、今回の授業による生徒の変容には、期待通りではなかった部分もあった。しかし、このことが来年度以後の学校との連携に意欲を沸き立たせることにつながっている。既に、今後の学習をどう工夫するか、保護者等、自主防災会以外にも連携を広げていくアイデア等について検討しているとのことである。

地域と連携した学習を取り入れたことで、生徒の意識変化はもとより、地域が学校に目を向け、学校との連携について積極的に考えるようになったと言える。

## (4) 検証授業の成果と課題

各時間の授業の評価や、授業後のアンケート結果を考察した結果、生徒の防災意識を高めるうえで、地域の防災をテーマとし、地域の人々との連携を重視した取組は効果的であったと考えられる。また、「過去の災害」、「予測される災害」、「現在の防災体制」を学んだうえで、町内のフィールドワークやDIGによる実習を行い、成果を発表するという「知識の獲得」「体験」「学習成果の整理・発信」というカリキュラムも適切であったと考えられる。



しかし、授業の成果が家庭での災害の備えにつながっていないという課題が残った。今後、学校の防災教育を、各家庭や地域全体の意識を高めることにつなげる手だてを考える必要がある。例えば、保護者が参加するフィールドワークの企画や、学習の様子を伝える学校新聞の活用、また、生徒が作成した防災マップを地域全体に情報を発信する等の取組を行う等、授業展開や取組に工夫を加えればよいであろう。このことに関しては、自主防災会の方も共通した課題意識を持っており、今後、連携して効果的に取り組んでいきたい。

また、生徒やその家族の生活範囲が潮岬地区にとどまらないことから、串本町全体を見通した防災についても学ぶ必要がある。町内の中学校が、防災について学んだ内容や成果を交流し、学び合う機会を設けることも重要である。

今回は第3学年を対象とした授業であったが、残された課題に取り組み、生徒が地域のさらなる防災意識向上を目指すためには、授業時数や学習内容を加えることが不可欠である。教員のアンケートで指摘されたように、学校をあげて全教員が取り組む防災教育カリキュラムを構築する必要がある。

## 6 研究のまとめ

### (1) 3年間を見通した防災教育カリキュラム作成の視点

総合的な学習の時間において、中学3年間を通して実施する防災教育カリキュラムのモデルを作成した(図4)。なお、紙面の都合上、ここでは教科等との関連は示していない。作成にあたっては、検証授業の成果と課題を踏まえて、地域との連携を重視するとともに、「知識の獲得」、「体験」、「学習成果の整理・発信」をセットとした学習を各学年に位置付け、防災意識の向上を図ることとした。また、福祉学習や職業体験学習等といった防災以外をテーマとした総合的な学習の時間との関連や、災害後を想定したボランティア活動との関連、定期的実施する防災訓練、体育大会等の学校行事との連携を重視することにより、生徒だけでなく教員にとっても「学校全体で取り組むのは当たり前」という意識をつくりたいと考える。

防災に関する学習においては、大きな災害体験を持たない生徒が防災を学ぶうえで学習の動機付けが重要である。動機付けとして、第1学年では潮岬地区について、第2学年では串本町市街地を中心とした地区について、昭和南海地震時の状況を学ぶ学習を取り入れる。また、地震や津波のメカニズムに関する科学的な知識を専門家から学ぶ機会を設け、次の学習に効果的につなげたい。

検証授業で実施したフィールドワーク、DIG、防災マップ作成等は、生徒に防災について実感を伴ったものと感じさせる有効な体験活動であった。第1学年では、生徒にとって最も身近な潮岬地区での体験学習を、また、第2学年では対象を広げて串本町市街地での体験学習を取り入れる。第2学年で実施する職業体験学習では、生徒は主に串本町市街地の事業所で体験を行うため、第1学年の学習内容との関連を図る。第3学年では、再び潮岬地区に目を向けさせながら、他府県を含む串本町以外の地域と防災学習の成果を交流できるようにしたい。ここでは、1年生と合同でフィールドワークを行う等、地域の防災の中心としての役割を自覚させることもねらいとする。

学習成果の整理・発信に関しては、第1学年では町内の中学校間で行った同様の学習について、TV会議等を利用して成果の交流を図る。そのためには、実施時期や具体的な内容について他校と協議する必要がある。各校において、職業体験学習の多くは第2学年で町内各地の事業所で実施されている。この学習の成果を、町内の中学校間で共有し、職業体験学習と関連させて活用すれば効果的である。第3学年では、先に述べたように、他地域と学習成果の交流を図る。将来、外出先や潮岬地区を離れて生活する際の防災を考えるうえで意義がある。また、中学校における防災教育の総まとめと位置付けて、ホームページで成果を公表できるように取り組ませたい。

今回の検証授業で課題が明らかになった家庭への成果の普及については、防災新聞の発行やホームページでの広報、また、学習報告会や講演に保護者の参加を呼びかける等、機会をとらえるとともに、様々な方法で取り組んでいく必要がある。

学年 テーマ	学習内容 ( )内は時数			主な連携先	他の総合的な学習の時間 等との関連	
	目的	主な活動方法				
1 潮岬地区の防災	知識 ↓ 体験 ↓ 発信	地震のメカニズム(測候所の人の講話)(2) 動機付け 南海地震の体験談(潮岬)(1)	地震が発生するしくみについて理解する。 潮岬地区における昭和南海地震当時の様子を知る。	過去に学ぶ	役場担当者 自主防災会	福祉学習 高齢者から地域災害の歴史を学ぶ。
		潮岬における地域の防災(2) DIG実習(井戸、防火用水等) 潮岬におけるフィールドワーク(2) 校区の防災マップの作成(2) 各家庭配付	図上演習により、地区の避難経路や危険場所を知る。 フィールドワークをもとに、潮岬地区の防災マップを作成する。	DIG ワークショップ フィールドワーク	自主防災会 行政担当者 保護者	福祉学習 高齢者を安全に避難させる方法を学ぶ。
		防災学習発表会(4) 学習成果を地域の中学校と交流 保護者参加	潮岬地区の地震防災に関する学習の成果を整理し、発表する。	発表会 TV会議	自主防災会 行政担当者 保護者	
		単本町における防災(防災担当者の講話)(1) 津波のメカニズム(1) 動機付け 南海地震の体験談(単本)(1)	単本町における防災について考え、津波のメカニズムや津波による被害について理解する。 単本地区における昭和南海地震当時の様子を知る。	過去に学ぶ	行政担当者 自主防災会	ボランティア学習 防災におけるボランティアについて学習する。 職業体験学習 体験学習時の避難方法について考える。
2 串本町の防災	知識 ↓ 体験 ↓ 発信	串本町市街地におけるフィールドワーク(3) 浸水及び避難マップ作成(3) 各家庭配付	図上演習により、串本地区の避難経路等を知る。 フィールドワークをもとに、串本地区の浸水マップを作成する。	DIG ワークショップ フィールドワーク	行政担当者 保護者	職業体験学習 体験学習時の避難方法を確認する。
		防災学習発表会(3) 保護者参加	串本町における防災について学習した内容を発表する。	発表会	自主防災会 行政担当者 保護者	
		他の地域での地震防災の取組と課題(1) 災害時におけるボランティア(2) 潮岬における地域の防災(2) DIG実習(井戸、防火用水等) 潮岬におけるフィールドワーク(2) 校区の防災マップの作成(3) 各家庭配付	他の地域についての地震災害の課題を学ぶ。 災害時におけるボランティアの意義と役割について考える。 潮岬地区でのフィールドワーク(1年と合同)を通して、WE B版防災マップを作成する。	ワークショップ	行政担当者 保護者	
3 他地域の中学校との交流	知識 ↓ 体験 ↓ 発信	他地域の中学校との学習交流(3) ホームページ、学校新聞、保護者参加	3年間で学んだ防災について学習した内容を発表する。 学習した内容をホームページや学校新聞で発信する。	TV会議	自主防災会 行政担当者 保護者	地域との交流 幼稚園との交流学習 読み聞かせ 福むらひの火の紙芝居
	全学年	幼中連携避難訓練(7月・10月・2月) 三角巾の作成、ケガ人の救出 煙体験、消火訓練(10月) 避難食体験(2月)		体験学習	自主防災会 行政担当者 保護者	
行事等との関連	第3学年 修学旅行(5月) 防災館での体験活動 第1学年～第3学年 体育祭(9月) 体育祭における準備、テント立て 第1学年～第3学年 環境学習(5月・11月・1月) 小中合同地区清掃		見学・体験 体験学習 体験学習	防災施設 保護者 小学校		

図4 総合的な学習の時間における防災教育カリキュラムのモデル

## (2) 地域連携の可能性と今後の展開

学校における防災教育の成果を確かなものにするためには、学校・家庭・地域の連携が不可欠である。このことによって、生徒たちに、地域の一員として、地域への愛着を持たせ、自分たちの町を災害から守るという意識の醸成につながると考えられる。また、今回の検証授業は、協力していただいた自主防災会の方にとっても、地域防災のためにさらに努力せねばならないという決意を新たにする機会になった。今回行った連携をさらに深め、自主防災会をはじめとした地域住民とともに防災教育に取り組むことは、地域の防災対応能力の向上に大きく貢献することにつながると考えられる。

災害発生時には、学校は地域の防災拠点としての役割を果たさねばならない。防災をテーマに学校と地域が一体となって取り組む実践を契機として、今後、環境教育や生涯学習等において幅広く連携することにより、地域の発展に寄与できればと考える。

### <参考文献>

- ・小村隆史、平野昌 『図上訓練 DIGについて』 (1997)
- ・佐藤郁哉 『フィールドワークの技法』 (2002)
- ・鈴木敏恵 『地域と学校をつなぐ防災教育』 教育同人社 (2003)
- ・鈴木敏恵 『防災プロジェクト』 学習研究社 (2005)
- ・和歌山県 『和歌山県地震防災対策アクションプログラム』 (2005)
- ・地震調査委員会 『南海トラフの地震の長期評価について』 (2006)
- ・和歌山県教育委員会 『平成18年度学校教育指導の方針と重点』 (2006)
- ・和歌山県串本町 『串本町津波防災対策基本計画』 (2006)